

アジアの現代文芸

MYANMAR

[ミャンマー] ①

初夏 霞立つ頃

မိုးခင်းကာလ ဖြူထွေသောခါ

マアウン・マアウン・ピュー 著

河東田静雄 訳

財団法人
大同生命国際文化基金

アジアの現代文芸

MYANMAR

[ミャンマー] ①

初夏 霞立つ頃

မိုးခင်းကာလ မိုးထွေသောခါ

マアウン・マアウン・ピュー 著

河東田 静雄 訳

財団法人
大同生命国際文化基金

初夏 霞立つ頃

マアウン・マアウン・ピュー 著

河東田静雄 訳

1990年11月14日発行

発行者 益邑 健

発行所 財団法人 大同生命国際文化基金

〒564 大阪府吹田市江坂町1-23-101 大同生命本社ビル13F

☎06-385-1131

制作協力 日経事業出版社

印刷／広研印刷・幸印刷 製本／関口製本

©1990 DAIDO LIFE FOUNDATION

読者の方へのお願い

お読みになりました感想，当財団へのご要望をお寄せ下さい。
今後，当財団出版物のご案内をさしあげます。

နွေဦးကာလပြုထသောခါ

日本の読者へ

このように日本国民の皆様へ御挨拶を申し上げる機会を与えられて、大変、光栄に存じております。拙著『初夏 霞立つ頃』を日本語に翻訳なさって下さいました翻訳家河東田静雄氏（ビルマ名 ウー・チョースォエ）へ心から感謝致します。

私が日本国民の皆様へ直接御挨拶を申し上げる機会に巡り合えるとは、夢々想ってみたこともありませんでした。今回、河東田氏のお力添えにより、直接皆様に御挨拶申し上げる機会を与えられたばかりか、私が全身全霊を傾けて書き上げましたビルマの伝統的な椰子の木登りの生活を描いた小説を、日本の友人読者の皆様に読んでいただけますことは、遠いビルマの地にいる私としまして、望外の喜びです。『初夏 霞立つ頃』が日本民族とビルマ民族の親善と友好、相互理解の一翼を担うものと堅く信じております。

最後に、『初夏 霞立つ頃』の日本語への翻訳出版のため、多大な協力をなさって下さいました大同生命国際文化基金の各位に厚くお礼申し上げます。

一九九〇年八月三日 ヤンゴオンにて

マアウン・マアウン・ピュー

メッセージ

ビルマ文学を日本国民の皆様方へ紹介するという文化交流の役割を担ってこられた日本人、河東田静雄氏（ウー・チョースォエ）を御紹介申し上げます。このことは私としまして心強く、大変光栄なことでございます。ビルマと日本両国の親善を発展させるべく、今回、大同生命国際文化基金により、同氏はビルマの著名な作家マァウン・マァウン・ピューの長編小説『初夏 霞立つ頃』を日本の読者の皆様方に翻訳紹介されました。ウー・チョースォエに感謝致しますとともに、この著作の翻訳出版に際しまして絶大なる御支援を賜って下さいました大同生命国際文化基金の各位に深く感謝の意を表します。

1990年 9 月25日

駐日本国ミャンマー連邦大使 ミャテェイン



မိတ်ဆက်လွှာ

မြန်မာစာပေကို ဂုဏ်သိက္ခာပြည့်စုံစွာ များ
နှင့်ပေါင်းစပ် ပေးလျက်ရှိသူ ဂုဏ်သိက္ခာ MR. SHIZUO
KATODA ခေါ် ဦးကျော်ဆွေ ကို ကျွန်တော်အဖွဲ့နှင့်
ဆောင်းအားရမိပါကြောင်း ပြောကြားရင်း မိတ်ဆက်
ပေးလိုပါသည်။

မြန်မာ-ဂုဏ်သိက္ခာ နှစ်နိုင်ငံ ချစ်ကြည်ရေး တိုးတက်ကောင်းမွန်
စေရေး အတွက်ယခု (DAIDO SEIMEI) အဖြစ်ပြုတ်ဆိုင်းရာ ယဉ်ကျေး
မှု ရံပုံငွေအဖွဲ့၏ ပံ့ပိုးအကူအညီပေးမှုဖြင့် မြန်မာနိုင်ငံ၏ နာမည်ကျော်
စာရေးဆရာကြီး ဦးမောင်မောင်ဖြူ ရေးသားပြုစုထားသော “နေဦး
ကာလ ဖြူသောခါ” ဝတ္ထုတိုကြီးကို ဂုဏ်သိက္ခာ ပေပရိသတ် ရွှေမွှေတော်
အရောက် ဂုဏ်သိက္ခာသဖြင့် ပြန်ဆိုပေးသည့်အတွက် ဦးကျော်ဆွေ အား
ကျေးဇူးတင်ဂုဏ်ယူမိပါကြောင်း၊ ထို့အပြင် ဤဝတ္ထုတိုကြီးဖြစ်မြောက်ရေး
အတွက်တစ်စုံတစ်အား ကူညီပေးသည့် (DAIDO SEIMEI) အဖြစ်ပြုတ်
ဆိုင်းရာ ယဉ်ကျေးမှု ရံပုံငွေအဖွဲ့မှ သက်ဆိုင်သူများ အားလုံး ကျေးဇူး
ဥပကာရတင်ရှိပါကြောင်းဖြင့် မိတ်ဆက်စကား လက်ဆောင်ပါး လိုက်ပါ
ကြောင်း ။


(မြသိန်း)
သံအမတ်ကြီး

ရက်စွဲ၊ ၁၉၉၀ပြည့်နှစ်၊ စက်တင်ဘာလ ၂၅ ရက်။

訳者紹介

河東田静雄氏（ビルマ人の間では、ビルマ名ウー・チョースオエの名前でよく知られている）とは、氏が私共のビルマ国立ヤンゴン大学ビルマ文学科に留学（一九七六―七七）していた時以来、親しくお付き合いして参りました。

河東田氏は、一九六六年から七二年まで大阪外国語大学ビルマ語学科で服部正一元教授、故原田正春元教授（ビルマ名ウー・チイツマンノエ）、現在、御活躍中の大野徹教授の下でビルマ語とビルマ文学を専攻しました。少年時代から大変な読書好きで、日本の文学作品、西洋文学の翻訳作品など数多く読んできました。その少年時代からの読書癖が、現在ではビルマ文学作品へ転化し、膨大な数の作品を次々と読破しているエネルギーには、目を見張るばかりです。

ヤンゴン大学への留学を含め、五回ビルマを訪問している河東田氏は、ビルマ語とビルマ文学に通曉し、ビルマとビルマ人をもっとも良く理解している日本人の一人として、日本とビルマを結ぶ架け橋となるべく、すでに次のようなビルマ文学作品を日本語に翻訳紹介しています。ルドウ・ウー・フラ著『風とともに』（一九八二）、ミンヂョー著『茶色い犬』（一九八四）、ルドウ・ウー・フラ著『サルウィン河の筏乗り』（一九八六）。ビルマ人の人生観、宗教観、歴史観、自然観、風俗などが余すところなく描写されているこれらの作品は、現代ビルマ文学を代表する傑作です。

河東田氏は、一九七二年から現在まで日本放送協会（NHK）の国際放送のビルマ向けビルマ語放送番組のプロデューサーをしています。日本とビルマの仏教文化の比較紹介、日本とビルマの詩歌の比較紹介、日本とビルマの諺の比較紹介など数々の優れたビルマ語の番組を制作し、正に日本とビルマの生きた文化の架け橋の役割を担ってこられました。

現在は、毎週日曜日夜の「リスナーとともに」に自ら出演し、在日ビルマ人知日派の代表格であるティンアオン氏（東京大学理学部博士課程終了）とのビルマ語によるユーモア溢れる味わい深い対談は、日本を知り日本人を理解しようとしている好奇心旺盛な若いビルマの聴取者にとって、有意義な番組となっています。

河東田氏が、このたび大同生命国際文化基金の協力により、マアウン・マアウン・ピュー著『初夏霞立つ頃』を翻訳出版なさったことは、ビルマ文学を長らく研究してきた者として、この上もなく嬉しいことです。この機会に日本とビルマの生きた文化の架け橋としての河東田静雄氏のさらなる御活躍を心からお祈り申し上げます。

一九九〇年九月六日 東京にて

東京外国語大学客員教授・ヤンゴォン大学文学部教授 ドー・スイスイウィン

装帧
山崎
登

初夏
霞立つ頃



太陽がぎらぎら照りつけ、暑い。

二十歳ぐらいの若者が一人、疲れきった様子でバンドウラ公園を北口から南口の方へ、まっすぐ横切って行く。若者は、襟付きの白いワイシャツの上に灰色の古びた上衣エジイを着、腰にはライトブルーの斑点の入った木綿のロンジーはを穿いていた。左手で雑誌を翳かきし、暑い陽射しを遮りながら、ゆっくり歩いてゐる。若者は、独立記念塔のところを迂回し、公園の南側のミサキの樹の下までやって来ると、ミサキの樹の周りに置いてある簀すの子この縁台の一つに、ぐったり腰掛けた。伸び放題にしていたとみえ、長い髪がむさくるしい。玉のような汗が、憔悴せうすいしきった顔からぼたぼた落ちてゐる。若者は、ハシカチで顔と頭の汗を拭うと、雑誌を団扇うちわがわりにして胸元をあおいだ。

そよそよと風が吹いている。木陰はひんやり涼しい。それで、憔悴せうすいしていた若者の表情が、やや清々しくなった。若者はスーレ・パゴダの方を仰ぎながら、心の中で仏陀に祈った。それから、周囲にいかめしく建ち並ぶ官公庁の建物、足早に往き交う通行人の群れ、フルスピードで走り去る真新しい自家用車などを、珍しそうに眺めていた。

そのとき、二十歳から二十五、六歳ぐらいの若者が二人、互いに話しながらやって来て、向かい側の簀の子の縁台に腰を下ろした。二人は、新聞の求人広告のことや、今行つて来たばかりらしい職探しの結果について話し合っていた。

体軀のがっしりした大柄な若者が、ずんぐりした小柄な若者に、「ところでルオンナイン、タハー スウエ社は、どうだった」

「だめだった。代わりに入る者が、すでに決まっていたんだってよ」

小柄な方のルオンナインと呼ばれた若者が、がっかりした様子で答えた。

「STBの方はどうだった。おれたちの名前、リストに載っていたかい」

今度は、ルオンナインが尋ねた。

「載っていなかったよ。採用予定者が四人。試験を受けたのが五十人。そのうち、十人が試験に通つてリストに載つてたわけさ。おれたちの名前はなかったよ。さらに、六人、落とされるんだってよ。

あーあ、あの会社もだめだったか」

「そんなら、おまえが前言っていたBEDCってのはどうだった。おまえの知り合い、なんて言っていたんだい」

ルオンナインが、また尋ねた。

「あそこは、もっと難しい。国軍士官の推薦状があるんだって。退役軍人で、失業中の者にだけ推薦状をくれるんだってよ」

がつしりした体軀の大柄な若者は、就職に関連して知り得た情報について、開けっぴろげに話していた。

「困ったもんだ。おれたちのような大学の予科卒ぐらいでは、下級事務員の職にさえありつけないよ。就職試験を受けに行くと、かならず大学卒の奴らと競争になるんだよな。いつも、奴らばかり先に決まっちゃう。大学卒の奴らなんぞ、殴り殺してやりたいぐらい、わんさといえるからなあ」

ぶつぶつ愚痴ったあと、ルオンナインはしばらく黙り込んだ。

「チョーズイン、おまえ、腹空いていないか。午前中かなり歩き回ったんで、腹減っちゃった。おい、おい、揚げ豆せんべい売り……、こっちに來てくれ」とルオンナインは、チョーズインと呼ばれる大柄ながつしりした体軀の若者に、また話しかけながら、やや遠くを歩いて行く揚げ豆せんべい売りのインド人を呼び寄せた。

先ほどから座っていた若者は、あとからやって來たルオンナインとチョーズインという二人の若者の会話をぼんやり聞いていた。彼らも自分のように、仕事を探している失業中のインテリであることが分かった。

そして、二人の若者が揚げ豆せんべいを買って食べ始めたのを見て、急に空腹を覚えた。じつは、朝八時頃、煮豆と残りご飯を炒めて朝食は食べてきた。だが、午前中、職探しのためいくつもの会社を訪ね歩いたので、腹の中はもうすっかり空っぽになっていた。腹が空いていた。さっきまで気が張っていたので、腹が空いたことさえ忘れていたのだ。

「ちよつと、インド人のおやじさん、おれにも十ピャー（二ピャーは百分の一チャット、一チャットは約三十巴）、おくれよ」

先ほどから座っていた若者が言った。それからインド人が渡して寄こした揚げ豆せんべいを、簀の子の縁台の端にちよつと置き、金を支払うため上衣のポケットを内から外までありつたけ探したが、たった五ピャーの小銭さえ出てこなかった。

それで若者は、面目のない、恥ずかしそうな顔付きで、「おやじさん、この揚げ豆せんべい、返すよ。小銭がないんだ」と言つて、揚げ豆せんべいの包みを取り上げると、インド人の男に返した。

そのとき、若者の膝の上に載せてあつた雑誌がずれ、ばさつと音を立てて地面に落ちた。雑誌がめくれ、挟んであつた書類が一枚、風に吹き飛ばされた。

ルオンナインは、自分の前に飛んで来た書類を素早く拾い上げて若者に返した。

彼は、その書類が求職申請書であることに気付き、すぐ、この若者も金に困っている失業者であると察した。

「ありがとう」

若者は、ルオンナインが拾ってくれた書類を受け取りながら照れくさそうに言った。

ルオンナインは、若者に、にこつと笑つて見せてから、揚げ豆せんべい売りのインド人の方を振り向き、「おい、おやじさん、このお兄さんにも揚げ豆せんべい、十ピャーやつておくれ。ちようどよかつたよ。小銭があつたよ。ほれ」と言つて、慌てて小銭を取り出して渡した。